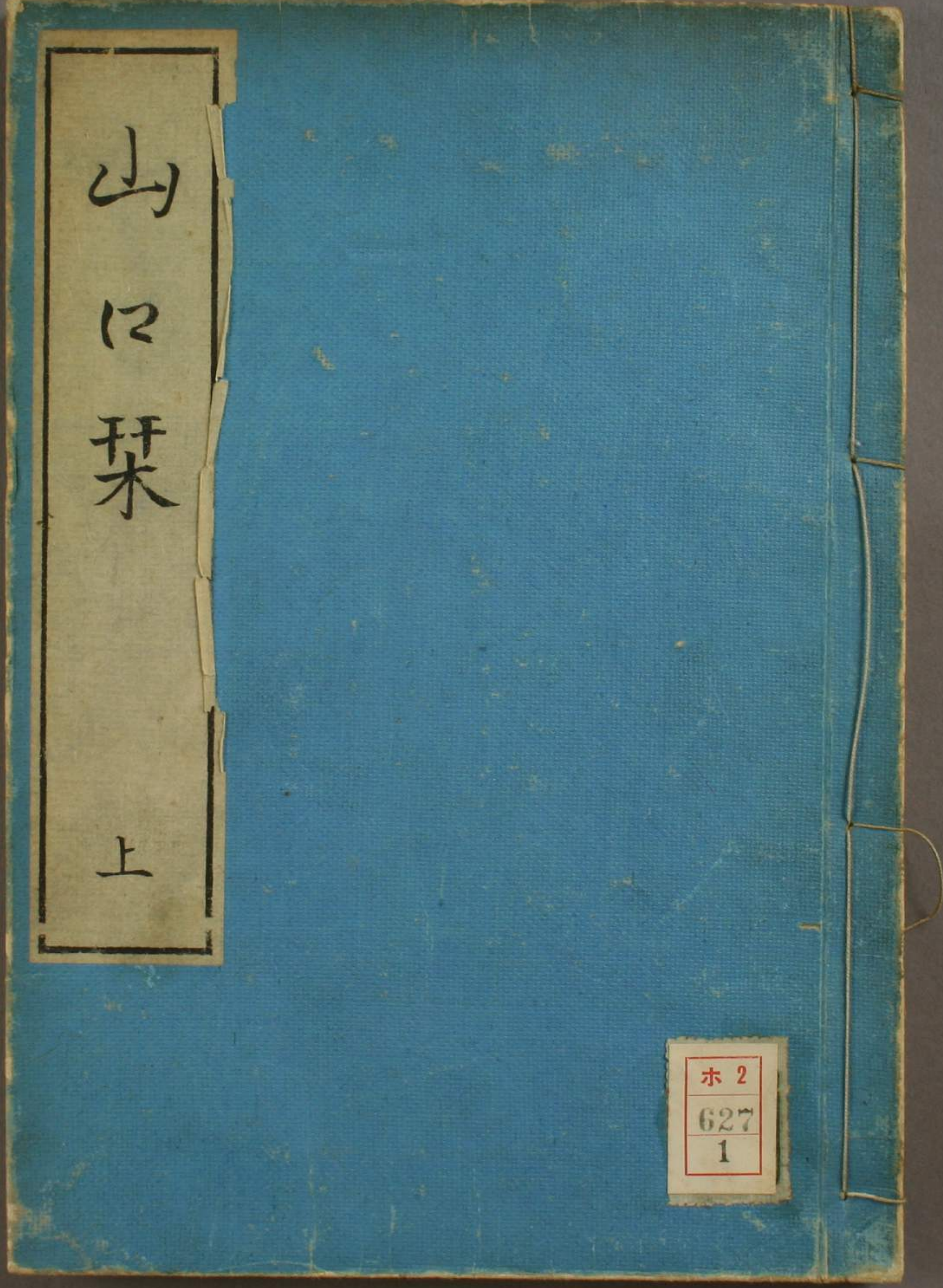
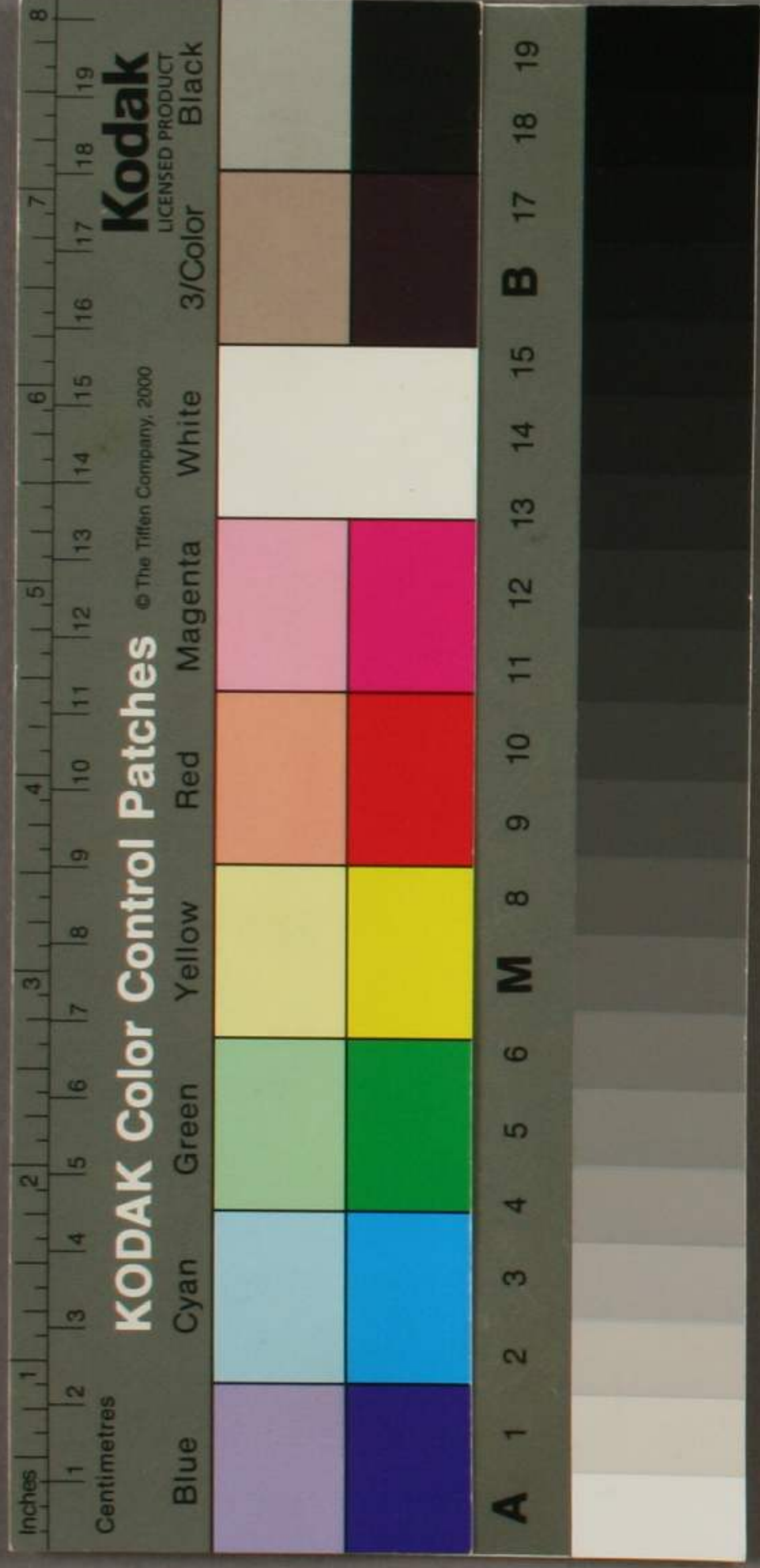




ホ 2
627
1



加
627
1

妙玄大德著

活山口栞語

全部
三冊

製本所

文海堂
羣玉堂



おにれをそののけ書

吉野隆平蔵書



かやひあもあはれささくささくささく
あしてあもあはれささくささくささく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく

山口聚

上巻目録

初丁方 ○總論 言語音聲に轉るに九を三つに差別有る事を示し

ハウ ○用言とあらぬ詞の音に轉るとの和義ため 二ヶ條

十三才 ○中二段と下二段とに活く語の事

同 ○洗ねふよく誤る活とも

同ウ ○あしせし

十四ウ ○さんせん

十五才 ○あてせて

同 ○せに 爲にへて將然言よりさあにせと活く例

十六才 〇ろ、らろ、

十七才 〇する ありけ 附せさるゝといふも別一の詞は非る論め

二十才 〇又 ひうせさる

同 〇又 ふうせうる

十九才 〇又 けろ さるる せはるる

十八才 〇又 四種活より けろ さるる と轉る定り

十九才 〇又 然さるるといふを正しくぬ詞を思ふるあや

十九才 〇又 すする

十九才 〇又 せはるといへたきれてけろぬ事

十九才 〇かよえん 何そえん かとの活よりきて意得へきあやも

十九才 〇また まる 將然言を受るゝ連用言を受るゝといふあ

十九才 〇つねに下二段に活く語もれ古くは四段にも活きしといふを覺
しきなり又それよりなるもあるあや

早才 〇四段と下二段と又中二段との三種に用く言も有る事

●あれまをちつて諸の行へるを論め也

十九才 〇いゝいゝ

十九才 〇とく

十九才 〇まろまろ まろまろ

十九才 〇けろけろ

十九才 〇かへる かへかへの別

ル才 ○るる

同ウ ○せめく

ル才 ○ける 來字の意は詞

同ウ ○蓋せろ

●これはまゝは加行よつきての活字

里才 ○給る 給るる

同 ○れにせろといふまゝよろし

同ウ ○あそ

里才 ○かよふる うよふる

里才 ○いま

里才 ○れも 佐行變格の活きとけふいへきを例め

里才 ○又 まきうはしきと

里才 ○れも 附 おもさか おもさか

●右も佐行よつきての論め

中巻目録

初丁才 ○四段の用き此第四音よりあまなせと活く語

●右も加佐多波麻羅の四行よつきての論め

同 〇みつ みつ 二ヶ條

二ウ 〇ふきつ

三ウ ○もみ豆 もみ陀に ニヶ條

●右も多行してけちや

五ウ ○ぬ いぬ ちん

六ウ ○奈行も四段の活有るがと覺しきち

●右も奈行

八ウ ○たふと飯 ふふとまる

同ウ ○れまも四段と中二段と二方と注くよりけ佐陀免

九ウ ○思ふる

十ウ ○たまふ たまふる

十一ウ ○又 給ふとたまふるとの寛狹

十四ウ ○又 先と思見聞と限れるうれ職め

十五ウ ○又 ふまふといふ説かもし

十六ウ ○被ひはらへ

十七ウ ○ふま ふまる

十八ウ ○うらふ

十九ウ ○うきふ

二十ウ ○なま かむあ

同ウ ○乃ま のほのほの差が

廿二ウ ○又 迷字と當ると延と河さういふ説

同 ○あさなりま

元二ウ 〇ぬとぬ

元三カ 〇たくとふ

同 〇あちとふ

同ウ 〇あしらふ

元四カ 〇ひろ ほに

●右も波行うつきての論

元五カ 〇志すは 今字使字をふ意は語の注くやう

同ウ 〇た乃む ぬのむる

元六ウ 〇うらむる うらみさる うらみさる

元七ウ 〇あろみる

●右も麻行

元八カ 〇あゆ

同ウ 〇くゆ

元九カ 〇こえけ

同ウ 〇もいもえ 〇用ハハ

元十カ 〇こい 〇い 〇用ハハ

同ウ 〇むくゆる

元一ウ 〇かゆ あれゆ

元二ウ 〇也行も四段の活きたなしと思えろ事

●右も也行のうへに論

ニオ。古き物も希々何やしく見えたるある事

司ウ。ほ志時ニヶ條

四ウ。ちめしニヶ條

五オ。かくなし

同ウ。うてし

六オ。いちあるし

同。おき陀志

同ウ。やうやう

七オ。とし茂字より詞

八オ。ぬふやし

ハウ。ちあし

九ウ。ねあきし

十ウ。又ね月あけ

十一ウ。いとな

十二オ。あし

同ウ。何けく

西ウ。又けく何やう何らふ類

十五ウ。又何けく何うく

十六オ。又何うく何れくの類

同ウ。かうくし夜かと諸活語の體言へ連る所の圖説

正四才 ○ あたらし

正五才 ○ むれし何をむか何ともいへる類あるを依陀

正六才 ○ 見おほし

同ウ ○ らしといふ詞の用言とおほしきたるあや

正七ウ ○ 又 附^言うことの初めより^⑤れ音をかき事

正九才 ○ 又 見らしの類と^⑥り^⑦の如きものといふぬ

三十才 ○ 何まぐ 何ぬほし 三ヶ條

正三ウ ○ 老らく 見らく

正四才 ○ 又 ^{うくといふ語をきろく語に添るも漢文よみの習ひなり}あはさるあや

正五才 ○ 漢文の訓

正七才 ○ けせてへめれより^⑧とつけし訓むましき字も

正八才 ○ 又 榮える 匂えるみ肖えるれ類を混あては意うましき事

正九ウ ○ 解れる 釋れるの類

四十才 ○ 以字^⑨かてとよむ事

同ウ ○ 唯字^⑩いいてとよむあ

四十ウ ○ はみ

同 ○ かも

四十才 ○ かみ

同ウ ○ けみ

四十ウ ○ まい

四五才 ○ほりけ ぼちけ

四六才 ○字音なりうやうて活き語 たりけ例あり有る事

四七才 ○種々訓讀乃事

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]



山口采上卷

言語

轉用 音

差別

人のこともの何れとつるにふく九そ三のふちめありと思ふは

言

用

言

一ははるきあふれのく用きつる所は随ひて

必その音れたる

射言

連接

二ははみえかうあひつたる其ところのふより

自然

轉

ておのつる其音のつる

三は用言射言ともふかられくとのさめりけるはあ

五十連 音韻

可然

格例

て只いつれあふのこれとくへは

うきとんくへそとて

くく字音よてよむへし

此三なり然るふれをえ皆あへてく五音相通といひてあ

くのみ意得たためなとてその轉り出る音よりて意へへの異なること
同一きも其筋混ひてことある故とらんもつひにはあやうもてむ
らむることもやうらん此邊を巡て詞の林の真にけいらんとせんは
まづ其山口よりてあれらのすぢく故よく辨へおくべき事とそむ
え々此處を社學の徒の中へはどうかぬとりやするたふひやお
ほらんそれいさうさう思ふはふさるるもかれ爲
今いさう志をりせんといふ○二用言の音れあうは志もうはる
と其音くより其言れ意もさうさう事也そむく用言くは人皆
の常におのづかにいひさうちをる如くぬとへたけさうきといへ用
きうこく用きうふあうやうは用言より用言へは連くあうとある故用

ゆし鈔もはてたといふべき書にては八ちきりともとあれをまねるものそと
やりの人の常といふめるもあひこゝをいひて又装鈔といふものなりなれとた
見たる事あしされとあひ抄の端よりそひの大むねとて何やらといひそれう図
をも物せるをみるにけふ八ちきりともと書にきりきりいふとあれそれいさ
いさいさいさいさいさいさいさいさいさいさいさいさいさいさいさい
かへ八ちきり上上の件の諸書よりて又八ちきを大成したる書とてたへつへ
猶圖しとてしけのこせる詞ともあきつはけりそとて四種の活
の図ともい准へて考へ知るへし 友鏡底廻影と名けたる書
を思ふるを集へおきたり ちて○二は躰言を

う二語あひ連るそのとてあけらぬよりて必其音の轉るといふ天地
のあえを天原かといふときとあぬと轉るといふ類をいふ これ正源鈔
一の巻にあま
といふ男声あぬといふ女声也とある如く躰業剛柔の別こそあれ用言のそとより音は從
ひて意も轉るといふ異なることなるをうる類をいふ用言と意うる人あはれとて
くたゝゝらぬ誤り也但し音の轉るまゝいふ其言のこゝろをいふとていふとて其故を天
少女かといふと下界のをいふと天上のそとをいふとていふとて其故を天
いふとていふとをいふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとて
むき異なるを知るへし加の行ても酒とあひといふとていふとていふとていふとて

ゆ。あねといふとそれと異りてあけ入るふねといふと槽をいふと詮とある也奈行にてい
とて金と槌との二をいふひとつの名といふとていふとていふとていふとていふとて
と木の二ありといふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとて
とるや持業といふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとて
也されとて轉音は格りよ上といひつる用言の活き動くことといふとていふとて
いふ音韻相通してたてていふとていふとていふとていふとていふとていふとて
類と又種々の例ありけ也凡そ五に分はけ一は先づ子躰とていふとて
音といふとて語を重ねていひつとていふとていふとていふとていふとて
れあめをいふといふとていふとていふとていふとていふとていふとて
目をま。血をつま。といふとていふとていふとていふとていふとて
次は九行に渉りていふとていふとていふとていふとていふとて
九行といふとて皆ある例あり加行といふとていふとていふとていふとて
といへるかとの如し佐行といふとていふとていふとていふとていふとて
也多行といふとて手をた。奈行といふとていふとていふとていふとて
也多行といふとて手をた。奈行といふとていふとていふとていふとて

行てたうけ天をあぬかとも也行てた冷をむや羅行てた末
をうら。和行あても音をこ和の如き此類ひ少うに
音をすへて言の下つめ音なれなり阿行の音の言中下にある如きもたまきくみゆる
をよみれた重りたる言もかり此事を於乎輕重義と名けたる書よくなくいひか
きつさて右の語格を明むるにつきて益をうるこも多したとてこれ嶽といふもの、如き
發語は濁音あるといふことかひひく右の語格を考ふる古事記は多氣とい
ける如くもは清音ありしことまうるといえゆる舂てはたけといふ詞をれぬ
うさね詞はたか山とやういふさるかに即ち万葉集七卷詠雲哥は月嶽を由槻我
高同十春雜るも月我高かといふけり然れどもたけといふ清音かろう正しきあり
もあり或は万葉二十卷に伊波岐等とあるは家人かろうをまり又青山をうら山か
るのう。も樹なりを明むるかすへて古書をよく便りたる事多し但し枯きと
もくろくといふ用書故枯木うれきとやういふも然るものれを舂書とあつてのさへ
みた末群かとのうらむらとつるも同一く右枯木かともう。木といへる例もある
かり上に出せる冷も其例といふも用言をきとひえ何といへるあれとそれさう又
うつててひや何といへる其もつきて今も云也さて枯樹をさう。きといふも古
語うれきといふも後の言とて意へういふ又うれきといへる用語のうきとも思ふへう
す猶うれきと舂といへるものなりいふことを委くは下巻に云へしはて群鶴の事を万葉
集はつるむらといひ列のことを常はほ。といへるなりとむれつれといふなりへきあり

と思えられくくのみのひかりへるたまきと意えさへき一例也又あまの原の葉の
かえあふちの舂かとはの其を又えち。てもうけられ必き四音であめすけであめい
うこそいへきさぬと思えられさのみなへさるこもあるえ置へき一例といへるた
ひあひあり。尔乎かとの助辞してうけたるはむる例とてなり。あからけ又四音
うるこも也そもいれられさぬ其さく少くもあつてはて二はつね
尽しうらむるあひの事とも又別々ともいふへし。はて二はつね
舂てたう二音といへるはてその詞をつねてむらつれ舂言といへると
きたた五音うらむるあり樹蔭火串荷前老叢かとの如し
うさたかはまやらの九
行は渉りて皆あるははら
神風瓊矛かとの如し。是四ふた五音を才二音に轉け白をあら。之を
いふ如し。神代紀に半端此云多那須衛といふあひうて木の泡をみか。矢の木をや
趣きく釈けるかとも此例といふこも解られぬし但し言語種論といふ書は舂語用語助辞
形状と分ちたる漢字を大形状作用声辞物名と別くめはるいこも覺えて其大くこ
こも思えられ然らうつ説といふれたのも只助辞なれ上上の件のやうに舂語の轉音の列
を示はつらに出さへきこあぬ如しこも必見とらむる人あるべきこもつてこもつら

へきえにへて抄書をしてある詞を只二二五けて平一き作用のともあれ形状あるおも
あれ助辞ともあれたて搖く音のそへるをえにへて皆活き言といひそれを用言しく名けま
きあき物の名ともあれたて二をえの類あるともあれすへてうくこくかきをえあ
くみことと駄言と目けて何れもあめはふ事あるそくし此事抄書をして巻を終る
に至るまで志なく用ある事ともあれえうく
まてこくよりかく事をめうそくをみにくしそ 五つは才三音を才五音とつ

眉

眉をまよふ類也

古事記中卷上麻用賀岐万葉五上惠麻比麻欲毘伎を
見えたり但し用の字も欲の字も^のの音にて用ひたるに大

あゝめゝといふ疑ひもあゝめへゞれと分はよの音にて用ひたる方へしとふ証文字鏡
は代黒字加支とあるにてあきゝうあるうへて用ひ欲も古書ともしよの音にて用たる例の
た多うれえさゝゝ疑ふへきゝあゝにきて和名鈔十八ヤ鴨を比衣土里とあるゝつきて正瀬
鈔四のひよどりゝも俗いふを五韓鳥の意歟冷鳥の意歟と云り思ふはモ萌黄をもよきと
いへるかゝも同一の意あるをこれらゝは才四音を才五音とつひて又一の例とし云
へくや外もか因りたる例あらんもあゝに今とて物に見えたとて覚ゆることを
まつ五種とてあゝのみ也さて又五種おあゝをひの事と云いへ此中才四音の
才一音とつるゝ才二音の才五音とつるゝと大う必まおのつうゝとつるゝと覺し
きを其はうあるは月夜をつゝゝといふよりえつきよといふゝおはく白雲をあらゝゝ
とはいへゝも白栲カをあらゝゝといひ代黒をあらゝゝといへれゝ眉マけすみゝまゝ
すゝといふのみゝといゝめあゝも多うれゝにはうは男女声剛柔の別きゝゝきゝ
をゝゝにゝゝめゝの例ゝても家人稀人をたいたひゝゝゝといふゝは限らゝゝ

いへんきれんともいふくひもあきつはあへぬとそゝおほきうれつてオ四音をオ一音オ
ニ音をオ五音ヨうつにうた黄金。この成きうねとやいたに酒槽をさけあねとやうに
ともちぬこゝと皆大く格例おのつうと定れりされたけせてねへめえきお成かあふ
かたまやうとと轉ちけかともいへて右のちある三種をひとめといふへくちの飲
とも思えられとかほ右五種と其音のうつれるおもむきかとも似
たれえこついつた二類の中うての小こられといふをく思えらる
此五種を皆連り

接くと了るべきものよりて必ずしも轉らてはえある自然の格りあり

る轉音の例なり
さて昨日今日のふといの轉けを此といふうづれるこゝにいへる
説はよるときは是等もやう轉いたる音のふと定れるあれ

えひとつの例格ありとも内ゆれ外ある類ありとも寛えされ大あは大轉音の類例は
あふしくし又久年をとせといふ年え年て年て其ある經く數けをよむとき教限りていふ古事
記傳十三卷に見えたる説てよく内えたりられちをしも又ひとつの格たる轉音の例あり
といふえいみきひこととててといふ言の意を同書九年神のと了ると釈を
ることともけはとそおもえるとそれよりみれ正湍抄五四とせをのみは矢え
せの幸いひてははせにさへ例の通音は類ひのやうもいへるとようしやはせとをに
をさいふもあてやばせといふくは矢橋の字をかりてうなるてそをきいうつらに
若雷とうなれとて若の字はある言のにへてきといえるもあらぬう如くからんうし
さて○三は用言射言とも必との定りをかくてた唇舌牙齒喉

の五のこ^音ふ又阿伊宇衣於の五のひ^韻きのられ^木きと^木うよ^木るありそ^木ら
きつ^木躰言^木て^木え^木あ^木ひぬ^木しといひ^木きを^木け。火を^木ふ^木いきを^木お^木き
といへる類又物の名あら^木てと^木ふ^木く^木を^木と^木を^木といひ^木類い^木と^木多し是等
を皆その行り^木く^木て^木豎^木其音^木れあ^木ひ^木う^木よ^木る也
此筋にてより正濫鈔に
斯えたい馬声はあまは
のうひて伊吹えの意致と叙ける
えけいこれよりそ亦ささるる又^我れを^木あ^木き^木つ^木きを^木す^木き^木といへる^木如^木き
を横^木其のひ^韻きの^木う^木よ^木る也又用言^木て^木え^木う^木や^木ま^木か^木を^木お^木や^木ま^木か^木ある
くを^木あ^木り^木く^木す^木み^木や^木く^木を^木す^木む^木や^木く^木といへ^木う^木如^木き^木を^木豎^木其音
のう^木ひ^木消^木び^木を^木な^木づ^木さ^木や^木く^木を^木さ^木く^木といへ^木る^木か^木と^木横^木韻^木の通
へる也
くろを丁そ五音相通と名けてどうくもひくもあかれ正濫鈔にあら
へと此通音と必の轉音とのちめあともおのつうとける語つうひ見えたりこれ
四卷よりひえ鳥ひ鳥のていへる丁は五音通せりといひ五卷四十七よりるを
一ぬる一あをいふときは同韻と通ずるやうに音と韻とをきへべきといへるを復

四卷より愈えいも崩えくもの解ちとくを消なりあるとくう^木け^木と^木や^木う^木
といへる^木活用^木の言^木と^木き^木め^木言^木の通^木と^木う^木を^木分^木る^木造^木語^木と^木も^木い^木ふ^木き^木也
も横^木も^木ひ^木通^木ひ^木て^木其音^木のみ^木聊^木つ^木う^木れ^木と^木その言^木れ^木あ^木も^木む^木き^木小
少^木も^木な^木き^木る^木こ^木な^木き^木は^木上^木い^木へ^木る^木天^木を^木あ^木ま^木声^木を^木こ^木又^木黄^木金^木
を^木こ^木う^木か^木と^木れ^木如^木く
こまや、いふふとこいふへきとの格り或てこま高
をこまとこいふへきとの格りあることあり其格
を^木こ^木う^木は^木ひ^木但^木し^木と^木を^木く^木と^木云^木ひ^木て^木ふ^木る^木と^木い^木ふ^木あ^木き^木と^木こ
ろ^木と^木え^木う^木み^木う^木く^木と^木は^木い^木て^木う^木く^木と^木い^木ひ^木て^木あ^木る^木へ^木き^木と^木う^木そ^木と
あ^木と^木め^木つ^木へ^木き^木あ^木と^木の^木さ^木う^木ち^木え^木か^木た^木う^木も^木う^木ね^木と^木そ^木は^木只^木丈^木の^木け^木う
た^木より^木て^木其^木處^木々^木の^木詞^木つ^木う^木ひ^木の^木き^木全^木の^木よ^木う^木い^木ある^木は^木み^木れ^木詞^木の^木ま^木う
へ^木な^木と^木より^木て^木あ^木り^木て^木必^木く^木さ^木と^木ま^木ふ^木轉^木聲^木と^木は^木も^木く^木う^木り^木こ^木と^木也
あ^木て^木又^木き^木い^木く^木う^木れ^木音^木便^木乃^木類^木と^木ま^木ず^木て^木別^木の^木ま^木と^木こ^木こ^木ろ^木う^木へ^木し^木
きい
とく

外ある中より其はさういふ家のさういふすぢくよひと
文字のふまひひといたくそのさういふおもむきのうまれるあま
もときてもたいしと意得べき事とてむうしれ書とも見えたる
えとあつてさういふものすへて正しくおのつういふ雅ひて正をし
き格りあるは降る世のいみじう意あつてとは見えて文章よ
ろしといふへき中にもあたふ此所をと思はう多しとてむけ
の近き世を歌のいふ假字つうひかともある世のち拙しうてこれ
いと正けうし昔はのみ字ふとける輩とも少ういふさの詞乃
活用のおののみか同意を用ひされう初字れ徒やありととい
ふ世よりその名図えやあうとよみ文うきさへともひれうれ古へ

のいふうけきこたうのみあふハ代集より過てさういふ後の書
とも見えさういふそれと比へても猶劣りうかづいてはいやめたるあ
あまた見ゆるはうれさういふさういふ抑詞の文字にやういふはうい
たるは清少書をねろき物乃ほらうさういふめられんやういふ
唯文字一つやあやうともいふてさういふさういふものさういふれえ
物て文をうきては云へきさういふは歌よきんともあはれいさう漢籍とも
のこは物せんとも深く意は用ふべきは詞の古きゆゑなる係しその事
させんやいさうともいふさういふと文字を失ひたるよりいみし
きとけさういふ文字うあそ其の故とあそこのさういふいふと思
ふく^自れうなりみづうれ意とていさう^他の事さういふなれ

活き言といふへきありさて實字物名字といふめるゝ當るはみか

躰言と名くる也但し其虚字といふはあはる言も躰言といふへきもあるはれ

と今も大うたのこりれをいふのみあり又實字といふたる言は
用言といふへきとらふとあしされ皇國言の躰用を漢字に用ひてあはる言は
定めりてはれと今も固より文字のふれ論はあはる言は語の躰と用をいふ
あるとあはる言は漢字に用ひて其大やをいふとかなん

其實字に當る言は中にこれの活きとあはる言は

うつねる言はこれの虚字とあはる言はこれの活きのさぬ

とはすゝゝ同一やうにさるをこれ老をねよともおいともいへる

詞の活きと意得其外ともこゑこゑのふいといふにうのた

ひあはれひといふ例のといへる説はとも皆いへるそふもある人

のうけはせる書に五十音の行りゝゝたりゝゝ初躰用令助といへ

るゝゝ示せるといふあはる言はこれの初め事はみあるにいたお

る八衢に四種の活きとてあはる言はこれおろそけをよゝ改めゝる者

とみゆ然るをちうき比又此八ちきとみかゝゝ五十音のゝゝゝゝゝ

とゝゝゝ四段の活きとらゝ中二段活下二段活といふへきさぬゝはたうあ

るも皆後の訛ありたゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

さありとてゝ初躰用令助とてらゝ人のいへるみみるふいみゝきあひ

こゝたる事今といふ明々ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

といふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

きともいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ち免を辨へゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

る説のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

おい。おも。といふ
は詞の活きのこ

うろとろありこをおよと令集解にあるとて、**駢言**の轉音なりとあるをおよと、**いの**活きといふんて古事記に月弱王とあるは日本紀に尤眉輪王とやれを見え、**や**やとよとも活きて用言也といふんく如くそは、**ぢ**あゝたりよと漢字の虚實死活に當ても出どうぬへし

又

古事記に伊毛波和須禮士とあるはときて礼を書紀にも邏とつり云云纂
疏に不可得忘也と註せられしを邏とつるをさるれし。の意は見給へる
そのこそ誤あり邏とても意々されし。あり此礼と邏とは五音の通也
といへるを精しくしをへてく詞の用く所は五音のうつり定まる格あ
りて漫にさうさうしつものごとく其轉用はあさひて意もうつる
ものなれ也然きは忘れしを忘らしつとも通音の故にうつり別
にむしつれ活用する。隠も云云古をさうんかうりあとお母くひる

これらと同じといへる解釋也

古事記傳十七の八十丁
又四十三の五十九丁

活用の言とく音の轉にる

よのけち免明王といふやうに

又
記傳三
十六卷

古事記の伊幣勢許曾をいせれ

んこそその意にて波の省れる所なりとて、是は伊波勢許曾とあるべきに
伊幣とある幣とて通音のみを記せとある活用の処といひ矯きとの
まてみたりなりとては、いへるなりしこと也と見えたるなりとては、ふ
名とて、俗人の説くまて、初躰用令助のひうこととて、たあふあうまされり
き、伊のいといひおなる如く古くもいへり、あやとて、まゆる、つうひの見え、万葉元卷又十
四卷おとよは、いとおほなるやうおれと、それとてよく考あれたおほくま、そとある漢字
の音の雅俗古今のたうひあ、とよなる事、て大くこいふなるへき活きといへき、おきさう如し
そのよう、おほ古事記日本紀あ、何くれの古書とも、もつきて、へて、を、え、別、ま、ば、い、え、ん
とおもふあり、その中、右の伊幣勢の
こゝに中巻の初、い、さ、う、い、あるし、
ま、う、る、こ、い、え、かり、に、な、れて、く、は、き、ん、の
う、う、た、せ、る、書、とも、あ、も、あ、る、中、は、猶、此、詞、の、活、く、筋、を、も、う、や、ま、て、り

と今を明に見あらうと人なりく見えたるにてもこそおれわろ
し意得あへくうらわさるるうらひよく思ふべしおほいそ、今れ世古乃
假字つひを正しゆく道のいと明なるるにつきてはさく此みち
をひらきし契冲阿奢梨あとの書くもの傳せれるにさへ今みれを
をりく此假字はわやまそりとみゆありまてわのみ意さるし人
々のも世といふ名高きはうせとちといへもそのうかつひのみうら
もききうらてまきわは信れる意もあさくあるこちれなるう如
く今より後やうく此詞の活用のにちれぬやうになりたる人せより
今をうへり見たる人みはさこそひらききものに見るうめつて彼おも
ひてうへひくも意をさむへきとわはあへひややるこそうあや
ちくを別さし

はめいそ又いそのにさきと
名けたる書等こいへるう如し

中二段と下二段といはく語の事

同語あうその言の活きさぬのみふと方こそて或も四段と下二段と
二活はるなり或も四段と中二段と二活けるもられれとけり此うそ
八衢二つともあり行りを異く活きぬをもうへかうう意をさき語ともとあ
る事なり八衢上のうは行も活も異て同意ある例をさしとられ
とそは誤あるよりすれとちさて同書又行りを異く
せしむ中二段と下二段と二用き
て意同じき詞をおたうにいへるもくもきいぬと称へつへき也
されとそはなめ考あれた一概とせいひかきやうとも寛あふみまといふ
ふ詞又也行
ともえともいふ活
く語あともあれとあへに云へし

つねよく誤る活き言とも

すれの本よりを抄本と申せあるはとあるをいふしは誤あるこ
といふあるしかるをてとふより凡て申と云詞をしと受ふは申
しと書て申しとはをさく書ぬとあれ其申せしとをえをれ
此鈔本の類の誤あるへしといふくあるれよりさて大和物語一本逢
幸のねふたよりなるぬきえたよりせし時を恋ききとみえたる
かともう。志しの字誤なるへしむるふくひ々みを准へあるべきあり
其中に眞字書のどのより入る字誤と覺ききをさくかかれと
たむ。つ三代實錄四十五卷に樹畏近江大津宮御宇世天皇乃云
と見えあるありえくれとむる。字誤ある幸を同書の内おかし
類ひの宣命これを見あはれるといふ明なる事にて即同書一卷十

同元卷六かるをみよ御筆より全く同じき宣命あるをいづれも御宇
之とありあるのみかられ四十五卷なる宣命もその詔詞の中より
たゞ平安宮御宇之倭根子天皇乃云とある処より之の字小
うるへきう六をか執るのみを世文字をかきつても思ふへしそのつぎ
の文ある御宇世の世に誤りて衍する字をうける。てとあめれ下志ろ
しめあし。のみよむへきといふ明なき。あふけやそもあし。を
せし。何やまれるもふるき文はこれらをのそきてはさく見えは
る事也然し今れよのあめとむりれどもはれとあし。とせしをあかる
ちよるるはむふきき事をおとひめるをみるあり必し
もよく辨へてあるべき。その理をも例をもえ。は
さくこれ儀に示せるは考へし

さん せん

うよはさんといふべきをかよせんあむさんをいひせんといふく
 ひ多し又此うう入るてあせんといふべきは、いふもさんおこせんをお
 こさんおせんをおさんといふやまるたひも少ういふれらるに
 へてう此詞八衢は佐行四段活といへると下二段活といへると又変格とてあ
 けたるものなちめどふよくふとりえとさる誤みかすぬれぬる
 しあやひかゝ何にといへるにの立居とてこおてもこさんともみち
 せはける声を聞せそくせるよひもあふれちふしあれをひとつ
 こくへあけらるなともいふや佐行四段活と下二段活との辨へのま
 ちうつしゆゑとみやうれ北邊氏を世のういあてうけこよなくて

うれ八衢の原もやうたへつとく切しき書きし人かるは、如斯
 ろを見て誰もおとろきてよくぬらんといふべきを詞の活きの道
 あるそ通さばいふべきを通さずと誤るなりと歎けを必しも通させんあるべき也
て又通されれとていふなり或は合せられぬれとていふなり合せられぬれとていふなり
 あんさんおこさんといふ誤る類も少ういふ意をつけて正しきよれりし

あて せて

論せさせてといふべきは論せきといひあをせてをあをせて任せ
 てを任せて又此うういふあむといふべきは、あをせてといひうの
 ろもいふてをうつろせといふあむひ皆謬也又論せさせてといふは誤れるも
 行変格のせうてあをたきをすれといふなりあり論せさせての上あるせも佐
 いふへし又さしてのせは下二段活也御覽せさせてといふてむうし書はあはるを考へ准ふし
 せに

きさすかといひてん
た叶てぬ也とあるへし
あれも互に誤り物に事多しぬとへて下二段の
活にて解せさるるといふへき故解さるるといひあてせさするといふ
き故あてさるる枯きゆにるをわづにるといふも何やあり中二段の活
にておひ^生さるるをおひるありゆにるをあらにるといふ類みかどろ
し但し万葉十四卷のあぬを波佐世氏云とあるかとは馳をはせさ
にるゝ活く言なれはせせさせてとこそあるへきゆも何れも今論
をもるとしつれ誤り似たるゆゝにやといふもあつてゆゝことをふるけ
馳もさゝいせと佐行四段活に用きたるゆゝにる例いとおほき事か
れたおもひまゝある事かうれ
次下の条いふ琴引とききせむひてひうせさせと
いへるをもいひうせといひたききしをそ
あやめりそといふへきと此はせと同一さきかれと誤り
いへるきとゆゝいふききとをよく辨へかくへきと也
抑佐行下二段はせは

せんかゝ活く言なるとその言の意にてあてせむるをはせさるるとい
ひもし又同行四段はしとぞんかゝ活く言なるとあてせむる
てはさるるといふ格なるといづれのこゝともみれ同じ然る書
にあてせあにるといふ詞をたあてせむるときとあてせといふへ
し俗言といへも何せさるるありと見えむるものと意えむる今い
とらるゆあれともかるときとゆゝ故ありとあぬのみてつひにま
とん人の爲に辨へおくると上といへる如くあてせあにるといふ詞
あてはあてせむるといふと何せゆにるといふこそ正しくはあれ
ととあてせといふ俗也とこそいふへかれあてせは古事記なり
阿佐受表勢佐々のぬくひきいふといふんこはたとへたよのこ

りふせさ^〇にといへきう如くなれもは^〇さ^〇せ^〇といへるを見まは
馳^〇をもさ^〇に^〇に^〇せ^〇とも活ゆるからんとこゝろりたるとおかし
ぬ^〇ひ^〇て後^〇も下^〇二段^〇のみあ^〇せ^〇あ^〇に^〇と活^〇けるのみあるもあ
くは四段^〇もあ^〇さん^〇あ^〇に^〇あ^〇せ^〇とも活^〇きしものそとた^〇み^〇わ^〇く
れ^〇もこ^〇もか^〇き^〇お^〇さ^〇なり^〇か^〇う^〇う^〇に^〇に^〇る^〇とさ^〇に^〇る^〇とは^〇き^〇ら^〇る
ことあり然るをゆき^〇に^〇る^〇といふ^〇を俗言^〇ありといふやうに聞
えてた^〇よう^〇に^〇さ^〇て^〇阿^〇佐^〇受^〇の受^〇も不^〇の意^〇と聞^〇ゆ
れ^〇もあ^〇さん^〇に^〇る^〇といふ^〇もとき^〇なるもけ^〇ふ^〇さ^〇う^〇は^〇る^〇し
ゆ^〇る^〇た^〇上^〇に^〇る^〇さ^〇に^〇る^〇と出^〇たる^〇に^〇る^〇もせ^〇に^〇る^〇に^〇れ^〇と活
ゝかれ^〇とれ^〇をふ^〇る^〇は^〇上^〇の細註^〇と^〇さ^〇に^〇す^〇せ^〇とも活^〇う^〇あ^〇し
と^〇と^〇る^〇如^〇く

もの^〇と覺^〇し^〇れ^〇た^〇也^〇され^〇た^〇あ^〇に^〇に^〇とい^〇言^〇のぬ^〇ひ^〇た^〇や^〇後
乃^〇物^〇に^〇在^〇て^〇あ^〇さ^〇せ^〇と^〇ある^〇へ^〇き^〇あり^〇て^〇その^〇あ^〇さ^〇の^〇さ^〇に^〇あ^〇せ^〇
に^〇せ^〇と^〇阿^〇佐^〇行^〇四^〇段^〇の活^〇に^〇活^〇く^〇ある^〇事^〇ある^〇し^〇然^〇る^〇ふ^〇あ^〇に^〇も^〇あ^〇せ^〇
に^〇に^〇る^〇と^〇活^〇く^〇佐^〇行^〇下^〇二^〇段^〇活^〇く^〇い^〇ひ^〇な^〇う^〇や^〇う^〇て^〇それ^〇を^〇今^〇の^〇時^〇
も^〇あ^〇に^〇に^〇とい^〇ふ^〇とい^〇う^〇て^〇い^〇ふ^〇へ^〇き^〇せ^〇に^〇る^〇と^〇活^〇く^〇に^〇定^〇り^〇た^〇ら^〇ん^〇せ^〇
に^〇と^〇は^〇活^〇く^〇事^〇あ^〇し^〇見^〇せ^〇を^〇見^〇さ^〇癢^〇せ^〇を^〇や^〇さ^〇し^〇や^〇に^〇に^〇と^〇活^〇きて^〇不^〇と^〇受^〇
る^〇も^〇必^〇しも^〇其^〇さ^〇さん^〇あ^〇に^〇に^〇せ^〇と^〇活^〇きて^〇せん^〇に^〇る^〇す^〇れ^〇と^〇は^〇活^〇
う^〇ぬ^〇也^〇さて^〇又^〇あ^〇に^〇又^〇の^〇例^〇に^〇は^〇さ^〇せ^〇て^〇を^〇引^〇も^〇あ^〇な^〇う^〇ぬ^〇こ^〇也^〇け
さ^〇に^〇て^〇とい^〇へ^〇る^〇も^〇い^〇う^〇は^〇こ^〇そ^〇例^〇も^〇い^〇は^〇げ^〇も^〇よく^〇お^〇み^〇ひ^〇辨
ふ^〇へ^〇し^〇次^〇に^〇ひ^〇き^〇ふ^〇を^〇別^〇条^〇と^〇し^〇て^〇に^〇る^〇次^〇に^〇ひ^〇き^〇ふ^〇を^〇別^〇条^〇と^〇し^〇て^〇に^〇る^〇
とい^〇ふ^〇こ^〇を^〇な^〇付^〇た^〇し^〇ふ^〇さ^〇と^〇ん^〇ん^〇ん^〇

又 ひうせさせ

仲正う女皇后宮はしめて参りたりける。琴引ときくせしむむ
てひうせさせむひなれと見えたるを今人々琴引い
きうせむひてひうせさせむひなれとやうにそいふある世に
名するせんちやうたちれりけるもの深みるふもくを辨るたり
とちうそををく見えにやうく上のくさういへること
ははふ味ひてその正きとちうめと深あきしむへし

又 ふうせらる

宇治拾遺物語^{十卷}

三条

主上御笛を所そくくけりやうく。調子

うへてふうせむひなれとあるふきぬを例のうやぬひてふう

せといへる。てこともかしその次。明暹調子異。こあたうへにあ

ふれた

云

御ふえふひてふうせられらとあるも明暹をしてふう

ちめむひなれとていさゆる他をうせさるる詞ありやるとする

をえ今の人にもなれとふうせれといふあるもあやぬり也すて。此

うち拾遺の目録には

後のむの志
とあてみえて

此事はいふやうても誤りて明

暹。笛ふうさせ。あふ事といへりこもふうせさせ。給ふ事とあるへき

処。上。の。条。い。へ。る。ひ。う。せ。さ。せ。と。同。例。あ。る。う。く。い。ひ。て。も。ひ。う

させといふ人と同じひうてててててててててててててててててて

ふうされといふへきとあるそりし

又 いるさるるせさる

くろくこの世に書ともつけ吉房朝臣の吉野拾遺といひしさせむ
あいにさせむし御らんしさせかといへるいとおほくて皆いといふに
そや図あるを今世にせむけこの哥も文も何うもといふはかけ
まうまへたるともうくなくともうく誤りもあはれてやうくうあ
らひうさぬるうそくろえね中むろしめよき書とも詞つらひ
を意めてますねへうしうへにくも上といへるするとさねは
との辨へくうく意得をうはこれら事ともえおのつうく明
なるへしゆて以つてうききぬへおくるしうけ八ちきさう上
くへたる如く此用言の道の志をうの又なき書うあれとその
中うもいううそや覚ある事のおほうちきうれるこれれと

る中ことくえくみおくへき上巻二佐行下二段の活詞とてあけ
くろくく○せさねふし此を二の詞と擧たるまじく意ゆき難
しうあは○いろ○さねるくとすは出くへき也 枕再子三月
三日月乃
辨柳のうづをせせ桃の花をしよさ。せ櫻くくさ。せあくくあり。せ
ひくをりくろめみんとえおひうけやんやとあをれうろ。え
せさねふく。え又えあきよせ。せせあきよせ。せせあきよせ。せ
せせとある。○さねる。と出へきやの例証也又うけしよ。せ。く。あ。せ。あ
え。いろ。と出すへき。く。め。た。く。考へてみつへし。く。ひ。と。つ。き。
乃文章くもあきめく。く。う。れて。み。え。る。を。や。あ。る。物。を。た。く。せ。さ。ね。る
とのみ出くてもうけ四段の活き言の。さ。さ。は。ま。ら。を。う。け。て。活。け
る。す。る。と。い。ふ。か。の。も。う。く。く。へ。く。 但し八欄上巻佐行下二段の活詞をうつねたる
末右はあけく外えといへることある
を。あ。あ。い。ひ。さ。ぬ。か。う。世。事。を。改。 せさねるといへるをむとの詞の如くいひて
二別二条をたて詳しうなる
え。う。け。羅。行。下。二。段。う。く。う。く。と。活。く。語。を。う。む。と。つ。く。て。れ。ら。る。

てまふいひ詞回字にあつても舞字にあらざるも皆同じ波行四段乃用
きよてさういふものたる事なきことこれを佐行の活に轉じて回之舞
之の意あるをうへは今回を四段の活き令舞て下二段の活きとくられたり
ゆゑ初学の徒かゝるもくは八衢に佐行四段活語ともを出せる處に
のみまゐるゝある紙みて令舞もあつたまはさんまはしかとのみ
活く語と意うるやうにあやまちもやうじん考るゝ令舞を佐行下二段
に活く言ありたり枕冊子にうへにゆつたうめしきせんかゝ仰ち
るゝ猶それまはせしむと集りて申まといひうはあゝあるを知
るゝし又この枕冊子の詞つひをもて上の件くいへるさけるといふ詞のつひさぬをい
く辨へまはせさせといふべき例あることを明めてこれをまはさせさせといひ
あやまちぬやうことさて四段活きてまはれといふを引回れかといふをまはれ
意うへべき事なり

ある思ひまゝなる事ありて又清む済む住むをみか同麻行四段活
語にて其活きさぬものと異なることなり然るにこれをまはさるゝを
をのゝる令清令済を佐行四段にてすぬさんすま。かゝ活りてすま
せんにすま。とやうなものは又令住も同行下二段にぬせ。んすぬぬ。
とやうこのみ活きてすぬさんにす。かゝる用りさるやういふのよに
書くもの詞つひをみれさるゝにうへよく辨へしめて其詞ともは
意をつけて見れ古書にもあるをちえに明あるいと多くて其例は
くるにふに但しかほいさうはいふ枕冊子に父母のうられうせて侍る
をたつて都すぬぬ。る幸ぬぬ。るさせたぬへと申れぬとあるかと
又せさぬといへききてつゝぬ事

あそまのといふ詞も四段活ある枕冊子御覽あそませむへる云
とあるふくひ諸書おほし然るにあれちたうふひといふへき紙
やすひ詞よりよませといひあひあそひといふへき紙もうやまひてあそ
せあそませといへるのみうてはれち此事も八ちまじ上卷^{四十}よりて
ここよりある事也但し他は然せざる詞とあれもつてもく下二段の
のみ活くとも意へくはれち八ちぬこの此取のいひ
ゆま少しある事ゆるを初学のほとふはかるふくひをえ皆ゆく
より佐行四段と下二段とあまた活くありとも意得らんそれより
る紙あはせてあそはせうよはせんといふ人もあやうてあそはよ
うよはせんといふ人も皆ひうてあやうてあつてもいつても筆れ
おもむんまに何れもありとも物にへしあしせしの辨なきもむ

やくの事あるとあれとあそへしとやうにみたりといひさきうへ人も
やあらんそくみかみうてそ必それくまはさる事なり就

まへ まへる

たうき人のうへ紙申又えゆてもその向ふをうやまひてといふ
う行むふをゆきまへとりたあふを取りまへあといへるは例の佐行四
段の活き言うてすかはち加佐多波麻羅の六行とも例の連用言等二
音より然いへり又六行とも二音
はまらつけてきせまへると活く語なり又六行とも二音
はまらも恒の佐行下二段くませまへると活くうてめつしきこともなれと受
る活きれ音通例は異なりはへて下二段の活言と四段の活語と連くか

又四段の活きの才二音より

ゆきくらゐさうす
つるおといふ如く

つける定りなりと此まゐると

いふのみをそれとあうなり

今まゐると標一にちとれなりく愕然言より連
る用言もなほあるや也かく^{ニム}令といふ詞の事いへる

處をり考

してその詞をあらうたねといふあつ出さる万葉二巻

コあはく川志くみくく
塞益ヒカニセを流る水ものとうくくぬし同十

五卷大舟の妹のふものゝ安良。麻勢婆をくみもちてやうきゝとのけ

又ぐくとうとひんとねて之良末世婆いもをそみほそあるへり

けろ後抄集戀三すきりもやとく人のいふすせえ寝覚ゝ露々

拂たわくみしとつるれと皆將然言をうけたりゆてませぬのはあも未然

をいへる婆をれえすせのせえ下二段の活きある事、とあるした、い

ふたえてさくのなりせば
也免とちうせをゆめさうまし

かゝるも婆を同く未熟にいはるなれとられせ。佐行変格の爲^セ。

ていゝゆゑうきせえあゝきせえかゝのせ。文字の佐行下二段活ある

とは別あり
これゝあゝまうまゝくもあ
と事あれ、猶童蒙の爲に解置也
ゆてつゝいゝいゝゝ
うせえを

と事おれ、猶童蒙の爲に辨へ置也

まゝの約なりといへる一説あれとそれと誤り也にへてせほあゝ

いせ。もうれ佐行変格の^レる。といふ語の用き。ていつれの語より。てと

恒ニ連用言よりつゞきやとりせえみろめおひせとかと皆忘る然ニ

まゝに用言へたるは まゝに截断言ありまゝを連用言こそまゝ
まゝし

と上列也支鏡ニ示サテ圓城見ク所キハむへし

せえといひてえりて聞えぬなるうつくおきよませえはま

くせとの約ありとたへられざるもあじさるはすくえきと同

言の活きよそ此くを省きていふことゝ何ま^にけ^ん_し何ま^にな^り_し

とへる如く其例もあれなり

つねに下二段に結く詞ものふろくも四段も活きし

物と覚しきうて又それとくく人かある事

萬葉三見毛左可受伎濃〔万葉〕西都良波可馬可毛あとりる〔万葉〕

活くへき詞のさぬとも見えられた〔万葉〕云さけすはけめといふへき例也

と八衢〔万葉〕のうは見えろを今思ふことかはいあへ佐久も波久

も四段と下二段とあつた活くして同一意の詞ありしなるへし

ゆゑにへて加佐多波麻羅の六行に涉りておほよそ中むろしより

た下二段活く聞申詞ともなるふ古くも四段も活きなりとふ例なき

詞とも其例少くしにまづ加行うては右のゆく〔万葉〕なく〔万葉〕か〔万葉〕と〔万葉〕有へき〔万葉〕

此類を同有へき

佐行は馳す寄にかと

馳す上より寄は神代紀歌にめろ豫嗣余豫嗣より来ね万葉十四はつま余之こせねとみゆくて思ふ何のゆゑ

の故に〔万葉〕かといふる詞もととよさん〔万葉〕よ〔万葉〕と用くならんれそ彼も重く

多行は隔つと云詞かと

あはへたへたつと云うのみ活くと覚えしと万葉五三から

波行はたあ枝ふかと

此二の中巻に別もいふへしたまふをすて用言とありつくる

なら見えろ聞ふへきとやういひ他つと見えろきとやういふとさう

麻行は令む止むかと

今むを是も中巻に云へし止むを四段に活らせる万葉五

羅行は恐る忘るかと

其例を出せるを見へし其外も万葉七八泊瀬川流水沫之絶者

許曾吾念心遂にと思けぬとある流水沫とあるみちとより外にみちを流る

此類おし知るへし又これとくく今のごろはた四段に活

く詞にこそと思えろふろくは下二段に活たりと見ゆるもけり

の活きのうゝあるへして四段に活や休むおのつう然るゆゑ下二段に活
うせるも力派あるにうて自然の詞使然の詞とてうれて聞ゆ浮みうろ
ふるうく
浮くるみづみつるかゝる例也とのみおまへりしうとよく考ふるうけろふ日記あるをそ
この文すへての意を考ふるまは自然の詞とこそ聞あれこれいけへ
いけ。うろかとの如く使然の詞也とも思ふれぬ也ゆれもいづるといへる
といふ。いづると活くがうはうてこそかほいきいづると活くある
へしされも此詞も四段と中二段と下二段の三種に活くなふんとそ思ふ
うくて又下二段に活くるは尋る小神代紀二の九五
同三丁施恩活すゝ無救活すゝイ
ケタへへと訓めりあるも宇津保藤原君巻にひたりれぬ一鳥これるを
いけて源氏螢いけ。みころし。みいぬ。めちるる宇治拾遺猪をいけ。

かうあるしけるはみて袂衣二下二いけてみんかゝるはあれとて
下二段に活く言あるとてけと明也さるも八ちやと上の
九八源氏手習ある
いけ。はて見まほしうとあるをなこなたいうさのつまれるうていづ
と用らるうはうしとさうと定めらるる宜しかりしかほられ下
二段に用ある語とみんそよるへきと中二段に用けるもすかちう
の八衢に引る蜻蛉日記一の三
十丁右あふんと思へといづる人そいつつきやと
あるこれありにもふとみれも下二段の活くもおもわれと下二段の
活なるも上二引るうはは藤原君巻ある源氏螢巻ある手習ある宇
治拾遺ある袂衣あるいづれも使然の詞いづれも取すいけ。うへかと射はいへるも其
もくも皆下二段活の使然詞あるを知へし
るは此蜻蛉日記あるも自然の詞ある事前後の文にていと明けくして右

をうし銀ちとあしへきたるやうなることありあをみれた加行四段活へ
きといふ詞あるあり白氏文集に折青苗とらる折を。イテと訓せるもへ
きての音便あるへなれ折字に當る詞と聞えたり
此詞俗に加行下二段も活くさるることなり
但し折は多義多音の字也
今も食利友のときあるへし
それはおのつう然る詞と聞え
又四段に活く時と云ふことあり
詞にうけて
もてあへくといふ詞を雅に
あき詞とおひて山口翠極
それ物も見えたりやいす考へ
州本物せし今も十四年前あるをそれ其事いひあきなり然るにおもひなりその州本の
うしれ處々いふなりある故にやむことえず今もことなり此一条をくはへ
おくありはてなり州本もなるといふのさうおほしき人それをも
うたれ但しふくに至りやの条にちなる事なりあき考へし

せめく

老ぬてあしうわみとせめきんあるをときてせめきを責來也
といへる説ありこえも某の卿の御説もきけと從ひぬし字鏡に恨

恨の註に世女久とあるにれうてあきもたて四段に活く語也
世よりいふことひの
せめくれやといへる

責來也今もめきんといふるをそれと異なるへしことなり已然言を誤りいふ人とききしに免
はせめめけりといふべきありうれ毛詩小雅常棣篇に兄弟鬩于牆外御其務とあるを聞てせめ
ケドモいふめるを世女の正しきことなりといふあきの聞を恨也恨者念時之名と註するは
うれ字鏡にちなり世女久と責來とは同じくめくをあるへして又せめきんをうし
んありといへる説もなりふみ恨を恨也と註する
うはあきくられとこの詞の意なりと一
來字にうつる詞のきくこと活く
とは其活用のゆゑなりぬへり

ける 來字の意の詞

來字に當りてくといへる詞古くの世にその活るやうにありれと思
える一はこきろくれと活くあや八衢に加行変格といふせうなり
古今おしりて諸書に數ありある事也きて二は加行四段に活く其証は万
葉十七玉つさのつひの家に婆又日本紀に歸化とあるをてウケリといふ

かところへハちきと上^三いもゆる四段活のオ四音をさうらりるれ
と活らせる例あり万葉^二久^一。麻豆^二か^一。の音を連射言とせる
も四段の活詞かれも也されも使のたれとへるも花のさ^二た^一。時の
あ^二れ^一。と^二や^一。全く同じ活きさぬありさて三^二は^一加行下二段^二活^一
そも万^二七^一。みつ^二う^一れぬちのいそき^二父母^一もの^二れ^一。僧^二爾^一。い^二ま^一そ
悔き^二う^一け。の音を^二の^一辞してうけること知へし。
悔るもすて下二段の
活詞ある定りあり但
し家の字あれとていつても皆けとよめられよろしうぬ事うて家字を
もぎしよむべき趣きあらずてさるぬ^二ひ^一の事^二も^一えけや^二け^一。傳^二い^一
といひてしへ^二祖^一。ち^二浪^一。ね^二保^一。豆^二ふ^一とも同じしぬ^二ひ^一うて今
え^二う^一く^二あ^一ひ^二え^一る事^二も^一さ^二同^一く^二修^一をも^二別^一。詳^二う^一せ^二ん^一と^二い^一

蓋せる

万葉集四卷^七。吾背子之蓋世流衣之云。此方二句。キセルコモノ。と

める^二ハ^一。セルと改めてもよむりうそのよ^二は^一。つさ^二い^一。人^二き^一。律^二の^一

世流^二友^一。鏡^二第^一。十段^二又^一。見え^二る^一。活^二き^一。語^二あり^一。あて^二蓋^一。を^二キ^一。とよめる^二一^一

きて^二あ^一。め^二た^一。此^二蓋^一。と^二加^一。行^二一^一段^二の^一。活^二の^一。著^二服^一。かり^二それ^一。を^二射^一。言^二の^一。如^二く^一

い^二ひ^一。か^二し^一。て^二さ^一。う^二せ^一。る^二う^一。け^二て^一。活^二る^一。と^二そ^一。う^二り^一。る^二

中二段のあしともう。せ。る。といふ。ぬ。ひ。う。け。へ。て。運用言を射言とあしてそれをさるうとする事通例也。この世流を佐行の四段^二活^一あし

て^二世^一。須^二し^一。も^二い^一。ふ^二あ^一。る^二さ^一。う^二や^一。ま^二ひ^一。詞^二の^一。方^二も^一。か^二る^一。あ^二り^一

る^二又^一。世^二留^一。ん^二歌^一。か^二し^一。て^二さ^一。う^二や^一。ま^二か^一。へ^二き^一。處^二も^一。い^二へ^一。お^二同^一く^二も^一。あ^二る^一。そ^二い^一

あ^二り^一。万葉三卷^二か^一る^二皇^一。者^二神^一。う^二ま^一。せ^二天^一。雲^二の^一。う^二ち^一。れ^二上^一。盧^二鳥^一。流^二鴨^一。あ^二し^一。い^二と^一く

やま^二ふ^一。し^二こ^一ろ^二か^一れ^二と^一。高^二須^一。と^二え^一。か^二く^一。高^二流^一。と^二あ^一。り^二又^一。十九^二の^一。元^二九^一。丁^二一^一。國^二者^一。之^二勢^一。志^二氏^一。安^二母^一。里^二麻^一。之^二云^一。え^二見^一。え^二る^一。あ^二し^一。え^二勢^一。須^二と^一。活^二く^一。言^二う^一。て^二い^一。へ^二る^一。と^二さ^一。う^二や^一。ま^二か^一。へ^二き^一。處^二も^一。い^二へ^一。お^二同^一く^二も^一。あ^二る^一。そ^二い^一

行^二て^一。さ^二う^一の^二四^一。段^二活^一。き^二羅^一。行^二て^一。さ^二う^一の^二四^一。段^二の^一。用^二き^一。あ^二り^一。と^二二^一。音^二里^一。を^二さ^一。う^二や^一。ま^二か^一。へ^二き^一。處^二も^一。い^二へ^一。お^二同^一く^二も^一。あ^二る^一。そ^二い^一

あて古事記傳

元八の九丁本文

景行天皇の段

い^二へ^一。お^二同^一く^二も^一。あ^二る^一。そ^二い^一

那賀祁勢流と汝之著

と受る事しつゝあるひも亦さあすせしうくることなる也。或て
そと貸す。足すかゝもはら同一例の依行四段の活きかれもその方
四音勢をそ^{うの伊勢勢新}復ら^{曾あとの如く}るれと受ることなるありなり^我
家^和といひ那何^西流と^和なることなる御衣を^{美和斯}
世流ころものけ蓋と^うよむことなるいふれくる事也。それとあはキ
とよき人せむか^{加行一段}ふひと^{加行一段}いふへくめこと上^{着服を恒に人皆のあれる}
詞としてみるや^{加行一段}いへるう如くかれせんも着服の字にあらて意
同一き語か^{加行一段}うその活きさぬ^{同行一段}二ありとあるべき也^{蓋世}
ヤ^ヤとよむときも着を^ヤ射言といひあしたるもみちせり^ヤの類例あり^ヤヤ^ヤ
とよむと^ヤケも^ヤも^ヤあ^ヤく用言とてあるありてつて^ヤいふき^ヤ。さ^ヤ見^ヤ
給ひ^ヤふ^ヤへるに^ヤこれ^ヤ
似て同く^ヤいふ^ヤ轉ふ^ヤへし

給えに 給えける

たぬ^たぬ^た何とつけあるを^た給え^たせる^たたまえ^たとやういふ^たふるき
は^はう^は文^はう^はん^はこそ^は物^はに^はへ^はれ^は中^はむ^はう^はの^はう^はあ^はん^はも^は射言へ連
くときえ^く給え^くける^く何といふ^くあるを^く給え^くせる^く給え^くせ^くあ^くの^くみ^くひ
へし^へ世^への^へう^へい^へな^へん^へ文^へを^へみ^へれ^へす^へへ^へも^へ源氏伊勢あ^へと^へ学^へへ^へり^へと^へお^へほ^へし^へき
筆^筆つき^筆なる^筆中^筆に^筆給え^筆せる^筆給え^筆に^筆何^筆と^筆や^筆う^筆う^筆ける^筆う^筆多^筆き^筆え^筆み^筆と^筆う^筆て
し^しの^しあり^し
これ^しは^し進^して^しは^して^しを^しま^しる^しへ^しし^しを^しを^しあ^しせる^しい^しひ^しを^しを^し白^しえ^しる^しか^しい^しひ^して
え^えし^えあ^えや^えく^えう^えい^えへ^えく^えあ^えめ^えの^え文^えの^えあ^えう^えう^えて^えい^えう^えか^えや^え図^えや^えあり^え
お^おこ^おせる^おとい^おふ^おえ^おう^おろ^おし^おう^おち^おる^お事^お

おこせん^おおこ^おける^おおこ^おせ^おたる^おおこ^おせ^おられ^おあ^おい^おふ^おき^おを^おおこ^おけ^おへ^おおこ^お
に^におこ^にせる^におこ^にされ^にあ^にあ^にや^にまり^にとの^にける^にこ^にお^にほ^にう^にあ^にし^に也^にの^に詞^に

もこれとてよりうへへくよむる意とてうへへ
そのうよむるを必しも佐
行四段二のみけり
たうよむと波行四段
の活字いかへき紙のへるのみありはてうよむをのへえ
うよはしあるへきうへらるやと初学の徒とおもふへたれり古書
をよくみぬるれうへむありうしその故え八衢上巻四十
をの説を見
てあるへし抑うよむをのへてうよむせといへること古き書とも
もあれこれとあり紙とてうへるえあるへうへり同じ語
の同じ行とて四段と下二段と活きて自他のうへはあいの例とはも
ら同じうへる散ひ詞とするのみれ事なり

いまん

万葉十二もち此日に出る月のぬるうへり君乎座いざ而あをを思

えんとあると同十五四いひとくみ君を伊麻勢の豆いづつまで
うへるあひをらん時のまなくとあるとてうへるあ
ろへしはてこの万葉か君紙いませとていへるを君をい
まちあむるうへあきて他を然せさるるたれと他のみつ
ら然あむ紙いませとていふとは異ありされと紙詞も下
二段と活くる使然の詞四段といまけんいまちと活くる
他の事かう自然の詞と分れて聞やあるとそこにおたれ坐
在或
と他へ行ふかたをいまんといへること万葉かとおほし
はきと其つうかとり紙とてその意とさぬうへたれと詞は
一つあて敬ふへき人の自ら然あむ紙紙へていまんといふ

皆四段の活のくなく即万葉五一さきく伊麻志〇とちやうへ
りさせ十五五新羅へ伊麻須〇伎美う目を〇にれらは行ふ〇に
いへる〇なり〇ま〇古事記神代やち母あ〇の云ぬし〇あ〇そ〇遠〇通〇
伊麻世〇婆〇ちみろ云つまも〇せらめあ〇も〇上〇賣〇通〇斯阿
禮婆云云〇女〇除〇きてつまは〇かし〇あれう〇阿禮婆〇と吾有る
はいへる〇むうへて他の在すをいへる也〇く意を異なれ
と詞と一〇ととも〇うれも四段の活きたるをうれ君を伊麻
勢〇と〇ひ〇と〇へといへる〇行〇し〇め申ありたう〇く〇
れ〇の〇を〇し〇あ申う〇れも意を異なれと詞と一〇
てくる下二段の活のわかれ也孝徳紀六請四衆於四天王

寺迎佛像四軀使坐于塔内〇清寧紀左便起柴宮權〇奉安置〇られ〇に
引て古事記傳十七ノ四一〇麻世〇使坐〇の切り〇のへるけふさやう〇
て伊麻世〇やせ〇司〇こ〇なる〇と〇より〇ある〇然る〇四
段活〇の〇い〇ま〇下二段活〇の〇い〇ま〇を〇ひ〇つ〇かして〇も〇れ
ち〇ま〇を〇へる〇つ〇う〇後〇は〇な〇れる〇八衢〇は〇其〇ひ〇の
な〇れる〇後の例〇と〇に〇出〇て〇典詞四段〇乃〇み活く
と思われし下二段の活も用ふる詞と見えたりとあるそれ
もうへたる事〇て即其例と引る伊勢宇津保源氏枕冊子か
とてとけし他の然志〇に〇四段活〇とて下二段の〇て〇の〇へり
とみ〇うれ引る中〇伊勢〇の〇る〇る〇とい〇て〇う〇あ〇る〇と〇い〇を〇とあるこ
と真名本〇は御坐津流〇と〇う〇き〇大〇の〇本〇は〇る〇る〇とい〇く〇

おまへ。おまへせと活へき小右といへる如くせ。ま。す。す。す。れ
と活きおほひるをうもてせとていへてせよといへるかと惣
て四段活と同じく。但し仰れるよせとのいへるも少
くぬよつきて論ある下よへし。又まへせと三段活
々は下二段中二段の活言とも異なりさるか。よれを變格の活
と名くるふふいふれ。事也。而てその變格の活。よてハちまこ
図の如き。よへき例証とも中昔の書ともよりきりあしといふた
くり夥し。れ。か。う。は。紛。え。し。四段の活といふへくやとも又下
二段の活きといふるきさぬも
見えたるけ。これ。れ。あ。る。ゆゑ。そのすちよくこてろえ置
へため其變格と名くる活さぬの例紙一二つ。出し。次。り。その
紛。え。き。も。れ。あ。め。を。も。せ。ん。と。い。ま。す。將。然。言。せ。文。字。あ。る。こ

とは竹取物語よき。か。れ。所。い。う。て。ろ。く。と。お。ま。せ。ん。といふ。よ。云
みておまへせ。かきてふせれ。源氏總角。古ノ。さ。も。お。ま。せ。た。ん
と思ひ。同花宴。御あいめんのついて。よきこえ給し。おまへせ。
も口を。同處女。よか。て。ろ。は。さ。や。う。て。お。ま。せ。ま。し。も。又
二。故。れ。と。お。ま。せ。ま。し。は。と。ま。え。い。て。枕。冊。子。春五。思ふ事お
まへ。覺。也。又。左右のれ。と。ち。び。お。き。奉。り。て。お。ま。せ。
ぬ。上。達。部。お。し。う。願ふ意のあ。ね。將。字。の。意。れ。ん。ま。し。不。れ。ぬ
更。自。か。と。て。受。る。と。か。て。將。然。言。な。る。例。也。次。二。連。用。言。ま。な
る。竹。取。お。の。ろ。も。に。ま。け。し。ま。し。つ。る。あ。り。處。女。古十。さ。る。へ。き
二。了。お。ま。へ。れ。と。ま。夕。つ。う。お。ま。し。さ。る。な。る。へ。し。桐。つ。か。卷

過去の志しうとすへて連用言に受る定りなり。来るといふ詞をた
受るは其通例に異りて將然言を受く。但しあれなきしやうなり。たゞ
うつたひれと先定りて。
ようこ。こ。こ。こ。といへる詞つうひいと多き故におもへるもおも
あしとはいもてたせし。おもせし。といへるかと考ふるし
將然言をやうて又希求ともへることも。来。御坐。おもせし。と互に例出し
はへし。か何いも来るもおもへるも其方よりあかへ行くも其方
よりあかへるおもひなり其趣さへさみこ似しれりなり。但し此ら
は上より下へ。今上。蔵用ある。おもせよ。と即そのせよ。はそへ
たるもあるといふ。こ。こ。いふはこれより来るといや
ようおもへる事にて来るを希求する。こ。このみいふ
いとふるく。よう。れ。定りかれと落窪物語か。とに折る。こ。こ。いへ

るも。何。今。おもせ。も。よ。文字をへていへる例も。へていへる例も
ある也。ついで。い。い。ん。四段活言。も。た。才。四音のま。う。う。希求とへる通
例あれとそれとすれは。よ。文字をへていへるもあることとさて此佐
行変格とも。い。る。といふ言の一種の用きれる故に。おもへる。と。ま。ま。こ。く
それと同じ活して言れ。を。い。へ。大坐を。躰。い。へ。る。を。な。為。る。とい
ふ詞して活せるからん。とも思へる。詞なり。よ。その為る。故。た。い
せ。の。み。い。ひ。て。希求。よ。せる。例。と。か。き。違。へ。る。又。い。う。こ。こ。い。ふ
こ。こ。く。同。し。活。きの。語。か。う。希求。よ。い。ふ。さ。ぬ。の。故。詞。と。その。詞。こ
ゑ。て。い。と。め。う。こ。き。も。や。う。て。変格。と。名。の。つ。く。用。き。な。れ。と。
知る。へ。し。ハ。ち。す。こ。上。或。右。一。加。行。と。佐。行。の。変格。の。す。へ。て。よく。似。る。を。い。へ
る。処。下。知。り。な。い。文字。を。へ。て。い。へ。る。こ。ろ。今。一。き。さ。み。精。く。せ。は
し。お。も。へ。る。と。よ。文字。を。へ。す。て。い。へ。る。お。も。せ。の。み。い。ひ。も。は。る。か。い。い。ひ。同。卷
十五。元。来。る。とい。ふ。詞。と。下。知。り。な。い。の。い。へ。る。例。か。う。と。い。へ。る。こ。ろ。こ。こ。た。し

するなり中昔の書も多しは將
然連用なく希求よりふもあきまて
る格りたるを今おとさんと活けるくも
おとさんといふ詞をも
おとし。おとし。おとせと四段の活くも云へきやうと思ひて
え定りえあきそと誤りつひは詞の活といふことの由陀免と
もはかへてうるめひうとるもとやうんと思へた也見ん
得んす侍ちとめんとはあきさるに
のうと返同こととは必思へくは
生巻よきよけよおとさうける御子と竹川に恥らひておとさうけ
るいとをうしけありかと見えて射言へ連くことろするといれ
れた四段の活よりうらる事まりあつれたる
寄生のたゆ子供と直
射言へ連り竹川の
万計こひつてうらる死ぬるすもまりと云
るかとの如くくも連射言たる例なり
さて更科日記五十五 五 日々日とく

れうとかりぬめりぬしとちてうとと里れとさうせよとい
ふをいと物恐しうきくその山越えて云とあきえ方四音
せよ文字派そへて希求詞とせろも四段のよとあきて下二段
の活語たる例也よくときやふへしさて又竹川十六をあきお
としぬさうし時此花を日とそくとあきそひ給しをとある
と一本よおとさうま。時とあるよとれとあきもあき聞也き
とあき通本よてこれ派解うとあきおとしまひひ。時とあ
るへきをそのひ文字の音優よりとあれるな侍へしついでと云
うみ序のさうもさふの
音便轉用准へちるをし
然らばれと過去のしへ連くへうとれ又あみ
しと過去れ。なとれと時といふ射言へ連くへうとれ也とれ

をちあちちまきうひる。おとしやうせよやのせ。文字す。文字の活るし。也と思ふへうひあれ。文字着れちす。うひる。これの活けるあう。其詞々下二段の活はあう。これもおとしする。同く変格活といふべき。これとちあはる。事右の如く時といひ連けたる。て此。まきと活く。友う。の用。辞なるあやあるし。してその過去の志めて受る。てす。て連用言。うきれる。定りなれ。右竹川のおとし。まきうし。時の。を。を。まき。音。い。理。り。い。明。け。し。を。う。よ。に。あ。ま。る。例。を。思。ひ。給。へ。を。思。ひ。給。へ。さて又れ。おとし。まき。ひ。て。おとし。まき。の。延。たり。たる。う。さ。る。も。宇津保国讓。今十八ノ。官。おとし。まき。時。より。官。ち。

垣の如おとし。まき。ひ。て。夜。る。も。御。め。り。に。おとし。まき。め。れ。は。又。藏。用。下。今十四。き。み。ち。敷。を。つ。て。おとし。まき。い。つ。れ。と。あ。く。あ。う。ち。へ。赫。く。や。う。ま。え。お。と。な。例。少。う。ひ。ほ。い。て。い。も。ん。あ。れ。も。國。讓。今十八。う。つ。く。み。お。と。さ。か。と。う。る。も。の。変。格。れ。活。の。お。と。し。を。の。へ。う。る。也。さ。る。う。う。ま。お。と。さ。か。も。截。断。に。る。に。さ。る。詞。也。う。く。て。あ。の。す。れ。の。ひ。さ。る。あ。よ。も。同。事。あ。れ。お。と。し。まき。の。さ。か。ま。き。る。言。と。連。射。言。と。を。う。ぬ。る。か。う。に。れ。も。意。え。お。く。へ。き。事。な。る。を。そ。れ。つ。き。て。又。こ。ろ。え。れ。へ。き。さ。う。れ。大。鏡。序。も。お。と。し。人。と。あ。る。其。う。ま。ふ。の。轉。り。と。あ。る。ま。き。人。と。つ。け。れ。お。と。さ。か。も。あ。は。連。く。言。を。う。ひ。た。る。と。い。ひ。そ。の。ま。お。と。し。と。四。段。活。く。言。と。こ。う。て。ま。き。う。う。へ。き。と。似。う。れ。と。大。鏡。序。と。そ。の。う。み。ち。や。く。其。詞。の。つ。う。ひ。さ。ぬ。乃。紛。ひ。た。る。う。然。ら。ん。今。の。本。と。誤。の。あ。る。こ。そ。又。弘。仁。式。陰。陽。式。大。官。内。尔。云。天。地。能。諸。神。等。波。平。久。於。太。比。尔。伊。麻。佐。布。倍。志。止。申。と。あ。る。と。う。れ。佐。行。四。段。と。下。二。段。い。ま。の。を。の。へ。う。る。也。抑。い。ま。の。お。と。し。ま。

○山口果上

○五十七終

